

< 学術論文 >

中国における翻訳理論と翻訳教育

—— 大学日本語翻訳教育と機能主義的翻訳理論の可能性 ——

符 曉 旭

東亜大学大学院 総合学術研究科 人間科学専攻
 延安大学 外国語学院
 fty1206@126.com

《要 旨》

翻訳は、言語・文化を超えた社会的活動というだけでなく、翻訳者が多くの文脈的要因の制約の中で問題を分析し、解決していく認知的プロセスでもある。「翻訳の専門化時代」に突入したと言われる現在、翻訳の捉え方、その社会的役割は従来に比べ大きく変化し、翻訳者への要求も高くなっている。しかし、現在の中国の大学日本語専攻教育は、求められる翻訳者を育成できていない可能性が先行調査研究から指摘されており、現行の大学日本語翻訳教育は日本語翻訳人材育成の重要なアプローチとなり得ていない可能性がある。その原因としては、翻訳教育の理論的な基盤の脆弱さ、「教育翻訳」と混同されてきた点があげられる。そこで、本研究では、中国における翻訳理論の変遷と各理論の特質を検討し、翻訳市場のニーズに対応する翻訳人材を育成するために適した指導理論を探索した。

翻訳理論を検討するにあたっては、「経験期」「近代翻訳理論期」「現代翻訳理論期」の3つの時期の翻訳理論を概観し、さらに、各理論が翻訳人材育成に与える意義やそれぞれの翻訳教育観の検討を行った。その結果、訳者育成を明確に視野に置く機能主義的翻訳理論の有効性が導かれた。この理論に基づく教育原理が目指す翻訳者像は、中国の教育大綱等で提示された翻訳教育の目標、翻訳市場の求める翻訳者像とも融合性が高いため、中国の大学における日本語翻訳教育の基盤理論として最も適していることが明らかとなった。

キーワード：専門化、翻訳理論、機能主義的翻訳理論、中国大学日本語翻訳教育

1. はじめに

中国は、日本語教育の長い歴史を持っている。その日本語教育は時代とともに発展を遂げ、多くの人材を育て、日中交流に大きく貢献してきた。修(2018)は、現在の中国専攻日本語教育^[1]は、急速な発展を遂げた「黄金期」の後、新たな改革期を迎えたと指摘している。2020年には、教育部^[2]の外国言語文学教育運営委員会^[3]の指導のもと、日本語専攻教育運営委員会がカリキュラムの基本計画を提案し

た。新しいカリキュラムは、学生の全人的な成長を促し、社会のニーズに適応できる能力を養うことを目的としている。

近年、日中両国間の経済的繋がりはさらに強いものとなり、両国間の言語・文化・思想の違いを埋める架け橋としての翻訳の役割はますます大きくなってきている。翻訳に対する需要が大幅に増加し、高いレベルの翻訳人材育成が求められ、翻訳人材を育成するための重要なアプローチとしての大学翻訳教育に対して更に高い要求が求められるようになってきている。

劉(2013)は、「翻訳活動の成功する鍵は翻

訳者にあり、その言語知識は基礎に過ぎない。翻訳者が翻訳活動で行うことは単純な言語変換ではなく、認知および異文化コミュニケーションと密接に関連した非常に複雑な知的活動である」(筆者訳^[4])と指摘している(劉 2013, p.51)。Kiryaly (2000)では、「翻訳教育の主な目的は、学生に翻訳プロセスを支配し影響を与える多くの要因を認識させ、翻訳問題を分析・解決する認知モデルを形成すること」とされている(Kiryaly 2000, p.9)。翻訳は単なる言語変換ではない。翻訳教育は、学習者に複雑な翻訳活動や翻訳プロセスを正しく理解させたいうえで、多くの要因に影響・制約される翻訳上の問題を解決できるように行われる。一方、Cronin (2005)は、「理論的な基礎のない翻訳教育は盲目的である。合理的な目標を設定することができず、教育課題に適した方法を作成・適用できず、教育の効果を測定・評価できない。よって最終的に社会が必要とする有能な翻訳者を育成することができない」と指摘している(Cronin 2005, p.250)。翻訳者の選択と判断には、ある理論的な立場が反映されている。したがって、学生がどのような翻訳理論に基づいた教育を受けるかは、翻訳教育において非常に重要である。しかし、いかなる翻訳理論にもそれぞれその背景、応用範囲、限界がある。中国における翻訳理論を概観し、教育現場と市場の現状を分析することで、中国の大学日本語翻訳教育に最も適した指導理論を検討することが本研究の研究課題である。

2. 翻訳と翻訳教育

2.1 「翻訳」とは何か

「翻訳」という活動が誕生して以来、古代から現代、西洋・東洋を問わず多くの研究者たちが、この活動・行為について様々な観点から定義を試みた。記号論的・言語学的な観点からは、翻訳は記号・言語・意味の等価変換と見なされ(Jakobson 1959; Catford 1965; Nida and Taber 1969; Wilss 1982; House 1997)、文化的・コミュニケーション的な観点からは、翻訳は異文化間のコミュニケーションの過程・結

果とされた(Sager 1983; Reiss and Vermeer 1984; Holz-Mänttari 1984; Nord 2005; Bassnett 1992; Lefevere 1992; Toury 1995; 王 1997; 黄 2000)。具体的な行為に注目する視点からは、翻訳は目的を持った意味形成活動と理解される(Halliday 1992; Tymoczko and Gentzler 2002)。一方、職業としての観点からは、翻訳は多くの関係者が関わる翻訳行為であり、チームワークの形で行う言語サービスと見なされている(Hornby 2001)。

謝天振(2014)は、特定の時代における主流の翻訳対象の変化に着目し、「翻訳」の変遷を「宗教典籍翻訳時期」「文学翻訳時期」「非文学翻訳時期」の3つの歴史的段階に分けている。「非文学翻訳時期」は「翻訳の専門化時代」とも呼ばれる。その上で、現在は言語サービス産業の急速な発展により、非文学テキストが主な翻訳対象となる第3段階「翻訳の専門化時代」に突入しているという。穆・邹(2015)は、言語サービス産業の重要な要素として、翻訳は、言語間翻訳における各言語の翻訳、記号法間翻訳における手話翻訳など、これまでなかった、あるいは重視されていなかった多くのサービスを追加している。また、翻訳結果の伝達方法は、口頭や書面でのコミュニケーションから、視聴覚やオンラインコミュニケーションへと発展し、人はインターネットを通じて即時の言語サービスにアクセスできるようになってきたと述べている。

時代の変化とともに、「翻訳」の諸側面も従来と比べ、大きく変化してきた。翻訳の評価基準は「言語の等価」から「コミュニケーションの実現」に変わり、翻訳者への要求は「原文重視」から「読者重視」に変わった。翻訳の対象は「宗教・社会科学の古典などの文学テキスト」から「実務文書・ビジネス文書などの非文学テキスト」になり、翻訳の作業は「対人活動」から「人と機械の相互作用」になっている(古野 2002; 影浦 2015; 謝 2015; 穆・邹 2015; 瀬上 2018)。

このような時代の背景から、穆・邹(2015)は翻訳人材を「あらゆる翻訳とその関連作業を巧みに遂行できる言語サービスのプロフェッ

ョナルな人材」と再定義している（穆・邹 2015, p.19）。瀬上（2018）も、機械翻訳の精度がますます高まり、翻訳家の仕事のあり方は近年大きく変わってきている現状を踏まえ、「翻訳者に求められるスキルの多様性」という現代翻訳の特性に注目している。

2.2 中国大学日本語翻訳教育の現状

2020年4月、日本語専門教育指導委員会は『四年制大学各専攻教育国家スタンダード（《普通高等学校本科专业类教学质量国家标准》）』（以下は『国標』と略称する）に基づき、『四年制大学日本語専攻教育ガイドライン（《普通高等学校本科日语专业教学指南》）』（以下は『ガイドライン』と略称する）を制定した。『ガイドライン』では、翻訳は日本語教育の学科の基礎であり、「翻訳理論と実践」科目は日本語の技能課程で、専門核心課程^[5]に属すると定めている。核心課程は、学生の日本語応用力、批判的思考力、異文化コミュニケーション能力の育成に重点を置いている。これらの能力育成は、「言語能力が他の能力を決定する」という枠組みを越えた能力育成観に立ち、言語能力の段階に関わらず、大学日本語学科の4年間を貫くものである（趙 2021, p.54）。「翻訳理論と実践」の教育目標については、学生が翻訳理論・方法を用いて日中/中日翻訳する能力を育成することを目指すとされている（『ガイドライン』2020, p.127）。

では、中国における翻訳教育はどのような状況にあるのだろうか。劉・陶（2009）は、「現在、外国語学科卒業生がたくさんいるにもかかわらず、ハイレベルな翻訳人材の不足という深刻な問題が際立っている」と指摘し（劉・陶 2009, p.19）、柴（2010）は「多くの外国語専攻における翻訳人材育成と、社会が求めるプロの翻訳人材との間には、まだ大きなギャップがある」としている（柴 2010, p.55）。中国の大学日本語専攻課程は、1, 2年時には基礎日本語、日本語会話などの専門基礎科目からなり、3年次から「日本語語学概論」、「日本文学史」、そして翻訳教育に当たる「翻訳理論と実践」などの専門応用科目からなる。趙冬茜（2021）は

2021年3月から5月にかけて、中国の国家レベルの一流専門学科建設大学^[6] 11校の核心課程の開設状況について日本語専攻4年生を対象にアンケート調査を実施し、科目間における学生の認識を調査した（有効回答数 459）。質問項目の内、『ガイドライン』に示された教育目標を達成しているかどうかについて、「翻訳理論と実践」は、「達成できたかどうかわからない」の割合が約40%に達し、「できない」「まったくできない」と合わせた割合が50%を越えており、日本語専攻課程の日本語科目の中で最もその割合が高かった。このことは他科目と比べて、現行の翻訳教育が十分な効果をあげていない可能性を示唆している。さらに見落としてはならないことは、趙（2021）が調査したこの11校は、中国における日本語教育のトップレベルの大学であるため、全体的にみると、中国における日本語翻訳教育の現状はさらに問題を抱えていることが予測されるということである。

翻訳教育に関する先行研究では、研究者・実践者たちにより様々な理論に基づく翻訳教育の実践が提案されている。しかし、時代の変化に合わせ、現在の翻訳産業の発展動向を考慮した研究は少ない。そのため、翻訳人材の育成が時代遅れのものとなり、市場の発展に対応することができていないことが考えられる。

現在の中国日本語翻訳教育の抱えるこの問題に対し、筆者は、大学日本語専攻における「翻訳」の位置づけが問題であると考えている。ここで「教育翻訳」と「翻訳教育」という2つの概念を区別しておきたい。「教育翻訳」とは、翻訳を外国語学習のツールとし、外国語能力を向上させるとともに評価するために翻訳を利用する教育方法のことである。「教育翻訳」は言語比較を中心におき、原文と教科書に提示された訳文の比較を通じて、学生は語彙、文法、テキスト表現などの言語面について学ぶ。さらに、自身の作成した翻訳文と比較し言語変換の過程での誤りを訂正する。このような教育方法に基づくコースデザインでは、学生は翻訳の知識、翻訳理論・スキルを体系的に学修することができず、翻訳授業は日本語と中国語の言語比

較を勉強することとの誤解を抱かせかねない。このような翻訳コースでは、学生は社会に出て、翻訳実務を自主的にこなすことができないという結果を産むことが危惧される。

一方、「翻訳教育」は専門的な翻訳能力を養うことを目的とし、様々な教授法によって学生の翻訳能力と実践能力を向上させることを目的とした教育である（穆 2004, p.25）。外国語専攻の学部生向けの翻訳教育は、外国語ができる社会人の育成を目指すというだけではない。卒業後、現場においてコミュニケーションを媒介し、成功させる人材の育成を目標とする。

しかし、長い間、そして現在でも、大学日本語専攻において、「翻訳教育」は上述の「教育翻訳」と混同され、翻訳は単に学生の言語能力を向上させる手段として利用されてきた。前述のように、『ガイドライン』では、専攻核心課程は「言語能力は他の能力を決定する」という枠組みを越え、「翻訳理論と実践」科目は翻訳能力の育成を目的とする。したがって、外国語専攻の学部生向けの翻訳教育は「翻訳教育」に属し、その教育は一定の翻訳テクニック・能力を身につけ、卒業後そのまま、あるいは短期間の研修で基本的な翻訳実務に従事できる人材を育成し、翻訳市場のニーズに応えることを目的としている。翻訳人材を育成するための重要なアプローチとしての翻訳教育は、時代の変化に対応し、市場の需要を指針とすることにより、実践力の高い翻訳者を育成する、専門的な翻訳教育が求められている。

劉（2013）は、「翻訳理論は、翻訳の性質、対象、課題に対する定義に影響を与え、さらに、シラバスのデザインや教授法の開発に影響を与える」と述べ、翻訳教育の質的向上における翻訳理論の重要性を指摘している（劉 2013, p.52）。翻訳教育は翻訳理論に基づいて行われ、理論が異なれば、翻訳教育も異なってくる。翻訳理論は古くから現在まで、すでに多く議論されてきた。本稿では、以下、翻訳理論に着目し、中国における翻訳理論の変遷を概観することを通じて、現在の翻訳教育に求められる翻訳理論についての考察を行う。

3. 中国における翻訳理論の変遷と翻訳教育観

中国における翻訳理論は、以下のような変遷を経験してきた。中国の大規模な翻訳活動は、漢・唐時代の仏典翻訳に始まり、その後、優れた翻訳者が代々実践してきた経験を集約し、一般性の高い伝統的な翻訳理論が形成された。改革開放政策（1978年）以来、中国は欧米の翻訳理論を盛んに取り入れ、その後も、基本的に欧米の翻訳理論を導入・適用する道を歩んできた（王 2021, p.14）。本研究では、先行研究（劉 2009；譚 2004；姜 2004）を参考に、翻訳理論の時代的区分を中国の伝統的な翻訳理論を中心とした「経験期」、近代言語学理論に基づく「近代翻訳理論期」、様々な分野の理論を用いて多角的・多元的に翻訳を研究する「現代翻訳理論期」に分けて考察する。経験期は紀元3世紀頃の仏典翻訳から1950年代後半まで、近代翻訳理論期は1950年代から1970年代まで、現代翻訳理論期は1970年代から現在に至るまでである。以下では、各時代の主な翻訳理論を概観し、そのうえで、対応する理論的パラダイムに支えられた翻訳教育観の分析を行う。

3.1 経験期——中国の伝統的な翻訳理論

中国初期の翻訳活動は仏典の翻訳を中心に、東晋時代の釈道安が大量の仏典を翻訳するうえで、訳経の基本的な立場として、「五失本、三不易^[7]」を主張し、これが中国翻訳論の始まりとされる。仏典の翻訳が最盛期を迎えた唐の時代、玄奘は道安の著作をもとに「五種不翻^[8]」の原則を提唱した。中国の初期の翻訳者たちは、仏典の翻訳の実践に基づき、直訳を主とし、意識で補完する翻訳方法をまとめ、中国の伝統的な翻訳理論の最初の土台を築いた。

この時期、翻訳にかかわる人々は原文の言語・構文・文体の扱い、翻訳の原則、翻訳者の素質などの問題に言及してきた。しかし、翻訳の明確な基準を提示した者はおらず、清朝末期に嚴復が「信、達、雅」という翻訳基準を提唱するまで、この問題は解決していなかった（劉 1994, p.3）。1898年、嚴復は『天演論』の序

文である『譯例言』の冒頭において、「譯事三難信達雅。求其信已大難矣。顧信矣不達，雖譯猶不譯也，則達尚焉。〔後略〕（平塚訳：翻訳作業には三つの難事がある。すなわち内容に忠実であること、ことばをわかりやすくすること、上品で典雅な文章にすることの三つである。内容に忠実なだけでもじつに難しいが、忠実さに気をとらわれて訳がわかりにくければ、訳したとしても訳していないことと同じである。ゆえに、ことばをわかりやすくすることを重視しなければならない）」（嚴 1898, p.1）と述べた。「信」とは、意味が原文と矛盾しないこと。つまり、訳文が正確であること、逸脱しないこと、省略しないこと、勝手に意味を加減しないこと。「達」とは、原文の形にとらわれず、翻訳が流暢で明確であること。「雅」とは、翻訳に使用する言葉は適切で、訳文の美しさ、言葉表現が優雅であることを意味している。嚴復は翻訳における3つの困難について述べているようであるが、実は理想的な訳文の3つの目標・基準を表現しているのである。この基準では、訳文は原文の意味を忠実に伝え、言葉遣いは流暢で上品でなければならないことが重視されている。「信达雅」が登場すると、後世の研究者たちから高い評価を受けるようになった。羅新璋（1984）は、「伝統を継承し、未来を切り開く役割を果たした嚴復の『譯例言』は、…現代翻訳論の先例を切り開いた」と述べ、また杉杉（1985）は、「信、達、雅」を現代中国における支配的な翻訳思想とみなしている。葉水夫、卞之琳（1959）などの翻訳家は、「信、達、雅の基準は長い間、中国の伝統的な翻訳基準になっている」と断言した。この背景には、19世紀の末、翻訳の対象に重要な変化が起こり、中国の翻訳界が西洋の文学や哲学作品の翻訳をするようになったこともあると考えられる。

しかし、1929年、陳西滢は『新月』に「翻訳について」という論文を発表し、この嚴復の「信、達、雅」を否定した。「非文学の翻訳は、忠実に訳されていれば、翻訳者は最善を尽くしたことになる。（中略）嚴復の第三の条件である上品さは、非文学作品では全く必要としない（中略）本を翻訳する前に、翻訳者は、上

品さ、到達度、美しさ、素朴さなど、自分で基準を設定してはならず、原文の基準を取るべきである」と発表し、「信、達、雅」を世界共通の翻訳基準であるとはみなしていない。陳氏は原文テキストの文体によって翻訳基準も異なる点に着目し、翻訳者は決められた翻訳基準に従うのではなく、原文に注目することでより柔軟な対応ができるようになることを指摘している。それでも、中国国内においては「信、達、雅」の影響は強く、100年以上を経た今もなお続いている。

1935年、魯迅は、「翻訳は2つの側面を考慮しなければならない。1つは読みやすさを求めること、もう1つは原文のスタイルを維持することである」と独自の翻訳観を提唱した。1951年、傅雷は「翻訳とは絵画と同様で、その求められるところは形の相似ではなく、精神の相似である」（永田・平塚訳 2009, p.213）と述べている。1979年、錢鐘書は「化境」という翻訳の基準を確立し、「文学翻訳の最高基準は『化』である。文学作品を一つの国の言葉から別の国の言葉に転換するときには、言語習慣の差異による生硬で牽強な痕跡が見て取れるようではならぬし、もともとの風格や味わいを保ってこそ『化境』に入ることができたと言える」（永田・平塚訳 2009, p.213）としている。「化」は本来的に「発展、生長、進化」による変化という字義を持っており、「化境」とは発展昇華の末に達した「最高境地」を指す語である。これを翻訳に当てはめて論じた錢鐘書は「化境」を「翻訳によって新たな生命を与えられた文学における最高の境地」と考えていた（永田・平塚訳 2009, p.213）。「化境」論は中国の翻訳界で一般に受け入れられ、錢鐘書は嚴復に次いで中国の伝統的な翻訳論の最後の代表者となった。

以上が中国の伝統的な翻訳理論における最も代表的で独創的な理論である。羅新璋（1984）は『翻訳論集』の序文で、「中国の翻訳論は、もともと古典文学理論と伝統的美学の支流として、統一から分離へ、次第に独立へと流れ、翻訳学という新たな学問を形成しつつある。千年以上にわたって、数え切れないほどの有名無名

の翻訳家や理論家の努力によって、中国独自の翻訳理論システムが形成されてきたのである。これにより、『按本－求信－神似－化境』という4つの概念は、独立しつつも相互に関連し合い、徐々に全体が形成されており、この全体は、中国の翻訳理論システムの重要な部分である」という有名な言葉を残している（羅新璋 1984, p.19-20）。「按本－求信－神似－化境」とは、原文の構文を丹念に模倣した直訳（按本）から、構文の自由な意識（求信）へと発展し、さらに「信」を土台により創造的な精神の相似（神似）へと「化境」に発展させ、翻訳を芸術の究極へと押し上げたものとみなすことができる。羅新璋は、中国の伝統的な翻訳理論から四つの重要な概念を抽出し、統合して、相互にかかわりあう全体を形成し、中国文化の特徴を持つ翻訳理論システムを構成したと言える。

上記から、中国の翻訳理論は、翻訳の効果と言語の美しさを強調し、翻訳作品の流暢さと芸術性のバランスを重視していることがわかる（黄 2010）。しかし、「信、達、雅」、「神似」、「化境」は、いずれも翻訳実務における翻訳者の認識、経験の総括であり、強い主観性を持っていることは否めない。「論証がまとまっていないため、翻訳の基準の意味合いが明確にされにくく、正確に理解・把握することが難しい」（劉・賈 2015, p.14）。中国の伝統的な翻訳理論は、全体として「印象論的、知覚的、経験的」（譚 1995, p.15）という特徴を持ち、理論のレベルに達しておらず、「体系性、客観性、科学性」（譚 1995, p.15）が不十分である。

中国の伝統的翻訳理論を現代の翻訳教育に応用する場合、文学的・美学的な観点から文学作品を評価し、鑑賞することができる。しかし、その翻訳思想は、主に翻訳実務におけるテクニックの総括に由来するため、個人の経験や感覚が重視され、理論的なシステムとして構築されておらず、また、曖昧で抽象的な一般化により、「どう訳すか」を明確かつ具体的に示すことはできない。さらに、研究対象が文学作品であるのに対し、現在の翻訳活動は文学以外の実用的な翻訳が中心である。そのため、大学で日本語翻訳を教える際の指導理論としては適さな

いと考えられる。

3.2 近代翻訳理論期——欧米言語学翻訳理論

20世紀の後半になると、Saussureによって拓かれた近代言語学が大きく発展し、翻訳研究の内容を大きく充実させた。言語学派の代表的な研究者には Catford, Nida, Newmark らがいる。Catford は近代言語学の観点から、「翻訳はある言語（起点言語）のテキスト材料を別の言語（目標言語）の等価のテキスト材料で置き換えることである」と定義している。また、この置き換えの過程では、「等価」がキーワードであり、翻訳実践の中心的な問題は等価成分の探索であり、翻訳理論の中心的な課題は「翻訳の等価性の性質と条件を定義すること」にあると指摘される（Catford 1965, pp.20-21）。Catford は言語学の用語で等価の異なるレベルを分析し、単語、フレーズ、センテンスなどの言語単位をマイクロレベルで切り分け、異なるレベルの言語単位の等価性を探っているのである。

アメリカの研究者 Nida は、Chomsky の変形成文法の基本的な概念を吸収し、コアセンテンスの概念の導入によって、最も効果的で科学的な3段階の翻訳変換モデルを確立しようと試みた。その意図は、新しい「科学的」アプローチで言語と等価性の問題を解決することにあった。また、Nida は成分分析、情報理論、コミュニケーション理論を翻訳研究に導入し、形式的等価、動的等価という新しい用語を提唱した。Nida (1964) はこの2つの用語を次のように定義している：(1) 形式的等価：形式的等価は形式と内容両面においてメッセージ自体に注意を集中する（中略）。受容言語におけるメッセージができるだけぴったりと起点言語の様々な要素に一致するよう注意する（Nida 1964, p.159）。(2) 動的等価：動的等価あるいは機能的等価は「等価効果の原理」に基づくものである。翻訳の受容者とメッセージの関係が原文の受容者とメッセージの間に存在した関係と実質的に同一でなければならない（Nida 1964, p.159）。Nida の翻訳思想によれば、「翻訳とは、起点言語のメッセージを、まずは意味

面、次にスタイル面において、目標言語で最も適切かつ自然な形で再現することである」(Nida and Taber 1969, p.12)。メッセージは読者の言語的ニーズと文化的期待に合わせ、表現の完全な自然さを狙うのである。Nidaの「動的等価」の核は、「読者の反応論」である(頓 2018, p.159)。

しかし、Newmarkは読者の反応を優先するNidaの路線を継承せず、等価性に達することは非現実的であると考え、「原文への忠実さに対する視点の違いは対立を招き、原文重視と訳文重視は分裂を生む。この対立と分裂は翻訳理論と実践において最も重要な問題であろう」(Newmark 1982, p.38)と述べている。Newmarkはギャップを埋める方法として、Nidaの形式的等価と動的等価を「意味重視の翻訳」と「コミュニケーション重視の翻訳」に置き換えることを提案している(Munday 2007, p.62)。「意味重視の翻訳」と「コミュニケーション重視の翻訳」の違いは、コミュニケーション重視の翻訳が訳文読者の得られる効果を原文読者の得られる効果にできるだけ近づけようとするのに対し、意味重視の翻訳は目標言語の意味的・構文的構造が許す限り原文の文脈上の意味を正確に伝えようとするところにある(Newmark 1982, p.39)。読者の反応と意識を提唱するNidaとは対照的に、翻訳者は読者以外に、原文作者と訳文に忠実でなければならないとするのがNewmarkの主張である。

言語学派は、「言語システム内・テキスト内の単語や文のテキストレベルでの等価的な変換を求め、それによって翻訳実践のガイドとなるルールを策定して翻訳実務を指導する」というルールベースかつ論理的な分析の特徴から、「翻訳科学派」とも定義される(姜・楊 2004, p.12)。このように、翻訳理論は従来の「直訳」「意識」から「科学」「等価」へと移行し、従来の翻訳理論の抽象的な「原則」から一歩踏み出し、具体的な言語構造、意義、内容の面に着目している。言語学的翻訳教育観は、長い間、外国言語文学の下位に位置づけられる翻訳科目の教育において、支配的な理論的パラダイムとなっている(賀 2015, p.58)。テキスト中心で、

言語の比較を通じて、語彙、文、文章レベルにおいて原文の分析、言語を変換するストラテジーと方法を指導するために用いられる。

3.3 現代翻訳理論期——多元化翻訳理論

現代の翻訳理論は、1970年代から現在に至るまで、「文化」と「多元主義」に特徴づけられてきた(張他 2021, p.52)。1970年代以前は、翻訳学は独立した学問ではなく、比較言語学の一部に属し、意味論の一分野と見なされていた(Newmark 1982, p.5)。1972年、Holmesはコペンハーゲンで開かれた国際応用言語学会議で「The Name and Nature of Translation Studies」という論文を発表した。これは翻訳という学問の「独立宣言」とみなされた。それ以来、翻訳学の理論が次々に生まれ、研究の視野が広がっている。言語学翻訳理論期とは対照的に、多元的な翻訳理論期は、翻訳研究の範囲をテキストの言語的側面から社会文化的側面へと広げ、翻訳研究を言語そのもののみ注目するのではなく、機能的、歴史的、文化的、社会的な分野と結びつけていったのである。この時期の主な理論としては、機能学派、多元的システム論、記述的翻訳論、文化的転回、社会学的転回、フェミニスト翻訳学、ポストコロニアル翻訳学などがある。以下では、中国の翻訳界により大きな影響を与えた文化派翻訳論と機能派翻訳論、またその理論に導かれた翻訳教育観を概観する。

3.3.1 文化的転回

1980年代の後半以降、欧米学界では文化批評と文化研究が優位な立場に立ち、研究者たちも文化の観点から翻訳の問題に取り組むようになった。Snell-Hornbyは、翻訳の単位はテキストではなく、文化にすべきであり、文化研究を翻訳理論研究に統合することを提唱する論文を発表した(Gentzler 1993, p.188)。BassnettとLefevereは、この主張が「エポックメイキング」であり、翻訳研究の分野で革命を起こすもので、彼らはこの「革命」を翻訳研究における「文化的転回」(cultural shift)と呼んでいる(Gentzler 1993, p.188)。

Bassnett と Lefevere は、翻訳されたテキストの選択、スポンサー、翻訳者のストラテジー、及びテキストの受容効果などの要素を翻訳研究の中に取り入れ、文化研究に基づくアプローチに従い、研究の焦点を文学翻訳における既存文化の評価、権力システム、運営方式などの「マージナル」になりがちだった側面に当てた（馮・劉 2008, p.48）。Lefevere は「イデオロギー」「スポンサー」「詩学」という3つの要素が翻訳に及ぼすコントロールを強調した。彼は翻訳を政治、イデオロギー、経済と文化の背景に置き、翻訳プロセスにおける翻訳ストラテジー^[9]に影響を与える各側面の原因を探求した。また、Lefevere は「屈折」と「リライト」理論を提出した。Lefevere によれば、「屈折」とは、異なる読者に対する文学作品の改作であり、読者がこの作品を読む方法に影響を与えることを目的とする（謝 2018, p.215）。その後、「屈折」という用語の概念の特定の意味をよりよく反映できる語として「リライト(rewriting)」という用語に切り替えた（劉 2009, p.395）。以上の翻訳思想によると、「翻訳は原文テキストのリライトである。すべてのリライトは、その意図が何であれ、特定のイデオロギーと詩学を反映し、特定の社会において特定の方法で文学を操作する」（Bassnett and Lefevere 1990, p.1）とされている。

以上のように、文化派の観点は翻訳研究の視点を原文テキストから目標テキストに移し、言語転換としての媒体から、翻訳行為の発生する目標文化のコンテキスト及び多くの翻訳を制約する関連要素へとシフトさせる（Munday 2007）。1980年代後半から1990年代初頭にかけて、欧米の翻訳研究は文化的な次元に目を向けることが主流となり、翻訳を「リライト」、翻訳者による原文のコントロールという思想は、人々の翻訳に対する理解を大きく深めていった。一方で、脱構築主義的な翻訳観は、Lefevere の理論をさらに進めている。脱構築主義的な翻訳思想の創始者である Venuti も「翻訳はリライト」という観点を認め、そのリライトは「支配的文化規範から支配される文化規範のヒエラルキーによって決まることが多く、ひ

いては訳文の生産、流通、人気までも左右される」（劉 2009, p.435）と分析する。Venuti が著書『翻訳者の不可視性』で指摘しているように、従来の翻訳の伝統は、民族中心主義と帝国主義文化の価値観で外国のテキストを形作るものであり、それによって「スムーズな翻訳」と「受容化」という翻訳の原則が提唱されている。受容化翻訳（Domesticating Translation）とは、訳文が明確でスムーズな翻訳スタイルを採用することを指し、読者の外国のテキストと文化に対する違和感を最小限に抑え、読みやすくすることを意味する。Venuti は、受容化翻訳は一種の文化覇権主義であると指摘し、抵抗力のある翻訳のストラテジーを提出した。それは長い間無視されてきた異質化翻訳である。異質化翻訳（Foreignizing Translation）とは、「目標文化における支配的な価値観が拒否された方法で外国語テキストを翻訳すること」（Venuti 1998, p.242）であり、受容化翻訳がもたらした「翻訳の民族中心主義的暴力（ethnocentric violence of translation）」を抑えようという目的に立つものである。目標テキストを作成する際に、原文テキストのエキゾチックな内容を保つことによって、意図的に訳文読者の馴染んでいる言語と文化の規範を打ち破る（劉 2009, p.440）。早くも1813年に、Schleiermacher は「できるだけ作者を動かさないようにして、読者を作者に近づける」（Schleiermacher 1813/2004:49）と述べている。Venuti (2008:15-16) はこの観点を受け入れ、異質化翻訳は、読者に、目標文化の言語で表現された外国語テキストに固有の言語文化の異質性を意識させることによって「読者を海外に送ることができる」と述べている。そのためには、なめらかではない、なじみのない、または異質な訳文スタイルを通じて、訳者は不可視ではなくなり、原文テキストの異質なアイデンティティを強調させる（Munday 2007, p.208）必要がある。Venuti は倫理概念を翻訳研究に導入し、翻訳研究における倫理と権力の言説の役割を強調した。彼は不可視の訳者を登場させ、訳者の主体性を高めた（劉, 2009）。

以上のように、文化学的翻訳観は、従来の翻

訳理論のテキストのレベルを超え、訳研究をより広い文化的な視野で捉えている。文化派は、訳を創造的な文化行為と捉え、外部環境と訳作品の相互作用に注目し、原文、原文作者の権威を解消させ、訳者の創造的な地位を確立し、訳文テキストの不確実性と多様性を肯定する。

この視点から、訳教育を考えると、「文化志向の訳教育観」は以下の特徴を示すと考えられる。1) 訳問題の視点が変わり、テキストや言語から、よりマクロなレベルでの社会的要因の役割に移行していく、2) 原文作者、原文、教師という権威的立場が変容し、訳者の創造性が肯定され、学習者の創造的思考が促される、3) 訳文の多様性が認められ、複数の訳文に対する批判と脱構築を肯定する。このように、文化志向の訳教育観は、言語志向の訳教育観を転回させ、訳活動における各主体の関係に対する理解を根本的に変えるものである。しかし、文化派の訳観は、ともすれば訳テキストや言語を軽視するあまり、訳の理論と実践とのつながりをつくることのできない恐れがある。

3.3.2 機能主義的訳理論

1980年代、プラグマティズム哲学の普及と訳の産業化・市場化の激化に伴い、文化派の理論パラダイムの中で「機能主義的訳観」が誕生し、主に非文学訳に対する価値判断システムを形成した(賀 2015, p.59)。機能主義的訳理論は、「1970年代以降、ドイツで最も影響力のある訳理論の学派」(譚 2004, p.255)であり、それはドイツにとどまらず、世界でも最も影響力のある訳理論の学派の一つである。代表的な研究者は、Katharina Reiss, Hans J. Vermeer, Justa Holz-Mänttari, Christiane Nordの4名である。

Reissはテキストタイプ論を打ち出しており、この理論は言語学派の影響を受け、等価概念に基づいているが、Reissが重点に置いているのは単語や文のレベルではなく、テキストレベルである。訳がテキストレベルでいかにコミュニケーションを達成し、等価を実現するの

かを検討している。Reissは、情報機能、表現機能、効力機能というビューラーの言語機能三分論に基づき、テキストのタイプを情報型、表現型、効力型に分け、それぞれのテキストタイプによって具体的な訳方法が決まることを指摘している。典型的な三つのテキストタイプでは、同時に複数の機能を持つテキストもあるが、常に1つが支配的であり、Reiss(1989)は、「原文の支配的な機能を伝えることができるかどうかは、訳を判断する上で重要な要素になる」(Reiss 1989, p.109)と強調している。Reissは、原文と訳文の機能が異なる場合もあるため、状況に応じて、訳読者のニーズを考慮して訳する必要があると指摘している。Reissの訳タイプ論の提案は、訳理論の研究視野を、低次の言語レベルを超え、訳のコミュニケーション機能にまで拡大するものである。

Reissの教え子であるVermeerは、等価論の限界を超え、訳文の目的と訳行為の目的を表すために、ギリシャ語のスコポス(Skopos:「目標」「目的」という意味)を訳理論に導入し、「スコポス理論」を提案した。「スコポス理論」は機能主義的訳理論において最も重要な理論である。スコポス理論の基本的な主張は、訳文は訳の目的によって決定されるというものである。スコポス理論では、訳はコード転換のプロセスではなく、原文に基づく目的を持った結果指向的な行為であり、この行為は協議によって達成されなければならない(Holz-Mänttari 1984, p.42)。訳の目的を決定する上で最も重要な要素の1つは、それぞれの文化的背景の知識、訳への期待、コミュニケーション上のニーズを持ち、あらゆる訳の対象となる訳文の読者である(胡 2008, p.252)。このような思想に基づき、Vermeer(1987)は訳を「目標文化社会の環境にあるTT(Target text: 目標テキスト)の受け手とTTの目的のために、TT受容の状況下でテキストを産出することである」(Vermeer 1987, p.29)(カッコ内は筆者加筆)と定義している。スコポス理論はそれまでの起点重視のアプローチからの脱却を意味しており、起点テキストを「王座から

降ろした」理論という見方もある（鳥飼 2013, p.122）。スコポス理論によれば、全ての翻訳が従わなければならないルールが「スコポス規則」である。また、「テキスト内結束性ルール」(the intratextual coherence rule: 訳文の読者にとって内部的に結束性があり、理解できるものでなければならない)と「テキスト間結束性ルール」(the intertextual coherence rule 訳文と原文の間にも一貫性がなければならない)という2つのルールにも従わなければならない。「テキスト間結束性ルール」は「忠実規則」(the fidelity rule)とも言われている。これらのルールは、重要性に応じて階層的に配置されている。忠実規則はテキスト内結束性ルールに従属し、テキスト内結束性ルールと忠実規則の両方はスコポス規則に従属するのである。つまり、翻訳者は、まず翻訳が意図した目的を達成することを保証し、次に翻訳が内部的に首尾一貫していることを保証し、最後に翻訳と原文の間の一貫性を保証しなければならないのである（Munday 2007, p.118）。翻訳者は、翻訳の目的に応じて適切な翻訳ストラテジーを決定する必要がある。

Holz-Mänttari は、Vermeer よりもさらに機能主義的翻訳理論の適用分野を広げている。Mänttari はコミュニケーション理論と行動理論に基づき、「翻訳行為論」(theory of translational action) を提唱している。Mänttari は、翻訳は、テキスト、画像、音声、ボディランゲージなどを含む複合メッセージング(message-transmitter compounds)の異文化間移動ととらえ、「翻訳」を翻案、編集、参照などの「翻訳行為」と置き換えている。Mänttari は言語間翻訳を「原文から始まる翻訳行為」であり、一連の参加者によるコミュニケーション行為であるとし、参加者として、翻訳の発起者 (the client), 依頼者 (the commissioner), 原文作者 (the ST producer), 翻訳者 (the TT producer), 訳文の利用者 (the TT user), 訳文の読者 (the TT receiver) をあげている（鳥飼 2013, p.126）。翻訳行為の過程において、参加者たちはそれぞれ異なる目的を持っている。翻訳は目的によって駆動さ

れ、翻訳の結果を指向する人間の相互作用と見なされている。

1990 年代初頭、Nord は機能主義的翻訳理論をさらに発展させた。スコポス理論の枠組みの中で、忠実規則はスコポス規則に従属する。しかし、目的規則に従って作られた訳文が、原文作者の意図に反していた場合、翻訳者はどう対応するのかという問いがあげられる。この問題に対して、Nord は「翻訳者が翻訳行為のパートナーに対して責任を有する」(Nord 2001, p.125) という点を認識し、もとの理論に基づき忠誠の概念を導入し、「機能プラス忠誠」理論を打ち出した。Nord は、翻訳者は原文作者を尊重すべきであり、作者の意図と翻訳の目的の間にバランスを取るべきであると指摘している。「忠実」は常に ST と TT の関係について言われるものであるが、忠誠の概念は人に対するもので、翻訳の依頼者と使用者だけでなく、原文作者に対しても翻訳者が責任を持つことを強調するのである。また、Nord は、翻訳におけるテキスト分析に必要な内的・外的要素を説明し、原文の機能に基づき、翻訳の目的に適した翻訳ストラテジーを立てる方法を解説し、「記録としての翻訳」(documentary translation) と「道具としての翻訳」(instrumental translation) という2つの翻訳方法について紹介している。

機能派翻訳理論は、原文主義の否定、多角的な翻訳の捉え方という点において、前節の文化学的翻訳観と共通した性質を持つ。産業分野における文化学的翻訳観の具体的な解釈として、グローバル化の文脈における翻訳産業の発展のニーズに応えるものである。この機能派は翻訳教師（翻訳実務家でもある）が主導した理論的变化である。Nord (2001) は、「機能主義的アプローチは、翻訳者育成のために発展し、現在でも機能主義的アプローチが最も役立つ主要分野の一つである」(Nord 2001, p.39) とし、廖七一 (2001) は、機能主義的訳者育成モデルを世界で主流となっている翻訳訓練モデルの一つとして挙げ、その操作性を高く評価している。機能主義的翻訳教育観は、翻訳業界の価値判断やプロセスを教室に導入し、翻訳者の社会

性を強調し、翻訳におけるテキストと社会的要素を結びつけるもので、より社会に密着した、理論的かつ実用的な教育パラダイムである。

4. 中国の大学における日本語翻訳教育の基盤理論の検討

4.1 翻訳理論と翻訳教育の関連性

以上の中国における翻訳理論の変遷を踏まえ、中国の大学における日本語翻訳教育の基盤となる翻訳理論について検討していきたい。中国の翻訳理論は仏典の翻訳実務から、「どのように翻訳するか」という問題をめぐって発展してきた。「按本一求信一神似一化境」という4段階の変遷を経て、中国の伝統的な美学概念を反映したものとなった。しかし、科学的・規範的な分析と論証がなされておらず、抽象的な一般論や一面的な捉え方に終始しているため、翻訳教育の基盤理論としては不十分である。

これに対して、欧米の翻訳理論は20世紀後半以降、「科学としての翻訳」の道に踏み出した。学問としての独立を堅持することを前提に、他分野の理論研究成果が翻訳学に吸収され、異なる概念や思想が翻訳の定義、本質への説明に組み込まれ、翻訳学の諸流派を拡張してきた。第3章で述べたように、言語学翻訳理論、文化的翻訳理論、機能主義的翻訳理論は異なる角度、異なるレベルで翻訳教育に理論的な基礎を与え、それぞれの翻訳教育観を築いた。3つの翻訳教育観の比較を以下の表1に示した。

大学日本語翻訳教育の基盤とする翻訳理論は

二つの側面から決定されると考える。それは、1) 時代状況に合っていること、2) 1) に基づき、理論から指導方針が明確に導かれることである。

4.2 機能主義的翻訳理論に基づく教育の可能性

以上より、言語学的翻訳教育観は、翻訳を静的で言語的な行為とみなし、「言語転換」を翻訳行為の本質とみなしていることがあきらかになる。しかし、翻訳には両言語に関わる非言語的な問題が多く、訳文と原文の言語的な等価だけに注目すると、実際の翻訳活動における数々の「等価できない」、「規則正しくない」現象を無視することになり、実際の翻訳ニーズに応えられないことになる。

文化派は、翻訳活動を文化的視点からリライトとして捉え、外的要因から論じることに注目している。これに基づく翻訳教育観は、同じ原文から異なる訳文の比較・評価に重点を置き、学生はマクロレベルで翻訳に対する理解を広げ、深めることができるが、言語を超えた文化的要素の相互作用を強調することで、翻訳の根本である「言語」から離れ、もう一方の極に偏っているように思われる。このような教育法は、「どのように翻訳するか」というガイダンスを提供しにくいいため、翻訳の初心者には向いていないと考えられる。

これら2理論に対し、筆者は、機能重視、目的志向であり、翻訳者教育から生まれた機能主義的翻訳理論が中国大学日本語翻訳教育の基盤理論として適していると考えている。その適合

表1 翻訳教育観

翻訳理論	キーワード	教育法	教育の重点	評価の基準
言語学翻訳理論	科学的, 精密的	テキストにおける言語の比較	原文を語彙, 文章, テキストレベルで分析し, 訳文を調整する	原文と訳文の等価
文化的翻訳理論	創造的, 多面的	いくつかの訳文の比較・評価	社会的要素の重視, 訳者の創造性・訳文の多様性を認める	訳文の受容性
機能主義的翻訳理論	プロ的, 実用的	テキストにおける各要素の機能的分析	翻訳の機能の重視, 目的志向であること	スコポスへの適切性

性は、以下の3点に反映されている。

まず、現在の中国翻訳市場は、1970年代後半から1980年代前半のドイツと比較的似ている。前述のように、翻訳業界は「専門化時代」に入り、翻訳の主流対象は宗教典籍、文学作品、社会科学の古典から実務文書、ビジネス文書、国家政府、国際組織の文書になってきている(謝 2015, p.5)。一方、当時のヨーロッパの経済大国であったドイツでは、観光、貿易、工業などさまざまな分野で非文学翻訳が大量に求められていた。翻訳の需要から翻訳者の育成産業を生み出し、翻訳教育に携わるドイツの研究者や教師は、翻訳実践において機能主義的翻訳理論を打ち出した(馬 2016, p.81)。機能主義的翻訳理論は、その誕生の背景から、主に非文学テキストの翻訳を行う翻訳者の育成過程から生まれたものであり、そのため高い操作性を持っている。もともと翻訳者の教育を視野に入れた理論であること、翻訳市場の現状を踏まえていることから、実務的翻訳人材の育成を目標とする大学の日本語翻訳教育の指導理論として適している。

次に、「専門化時代」では、翻訳がより個人的な創造的要素を含んでいた個人による文化的な行為であった時代から、チーム行為、企業の支援の下でのビジネスの行為、翻訳者が生計を立てるために行う職業的行為へと発展してきた(謝 2015, p.5)。一方、機能主義学派は、新たな用語の提示により翻訳の再定置を試みており、一定の先進性を示している。例えば、Holz-Mänttari は「翻訳」という言葉を「翻訳行為」に置き換え、翻訳が目的によって駆動され、翻訳の結果を指向する人間の相互作用とみなしている。また、Reiss は、「総合コミュニケーション翻訳 (integral communicative performance)」を提唱し、概念的な内容、言語形式、コミュニケーション機能を翻訳の範囲に取り込み、翻訳の内包を広げている。さらに、翻案、編集、資料検索という行為を翻訳行為の中に組み入れることは(謝 2018, p.135-196)、現代におけるチーム行為、ビジネス行為、専門行為としての翻訳のあり方と一致し、翻訳の外延も延長されている。

最後に、従来の考えでは、翻訳は高度な言語能力が求められる実践活動である。日本語翻訳コースは3年生の第一学期(第5学期)に開講され、学生は日本語を学んでから2年しか経っていないため、言語能力の不足は無視できない事実である。しかし、「専門化時代」では、翻訳のツールと手段がコンピュータやインターネットなどの現代技術の介入により、翻訳の効率や質が大幅に向上した(謝 2015, p.5)。それゆえ、豊かなオンライン資料や翻訳ツールの利用により、翻訳の質や効率を効果的に向上させ、学生の言語能力の不足を補うことができる。翻訳市場のニーズに合わせ、「翻訳教育」と位置づけられる翻訳コースは、ツール能力などの言語能力以外の能力の育成にも重点を置くべきである。機能主義的翻訳理論は、語用論的・文化的側面に注目し、言語能力とは異なる翻訳能力の特性を強調する(Nord 2001, p.17)点が、改めて、翻訳教育の目標や人材育成の理念と合致している。

以上の3点から、機能主義的翻訳理論は、現在の翻訳理論の中で、大学の外国語翻訳教育の基盤として適した理論であると考えられる。

4.3 機能主義的翻訳理論に基づく翻訳教育方法

ドイツの機能主義的翻訳理論は、「機能重視あるいはテキストの機能重視」の観点から翻訳を検討する様々な理論であり(Nord 2001, p.1)、代表的な理論にはKatharina Reissのテキストタイプ別翻訳理論と言語機能理論、Hans Vermeerのスコポス理論、Holz-Mänttariの翻訳行為理論、そしてChristine Nordの機能プラス忠誠のアプローチがある。理論はそれぞれであるが、その焦点は「翻訳の目的(=訳文の社会的機能)が翻訳の方法を決定する」ことに当てられている。Nord(2001)は、機能主義的翻訳理論のうち、訳者育成に最も応用が利くのは「翻訳ブリーフ(Translation Brief)の重要性」「原文テキスト分析の役割」「翻訳問題の機能的階層化」の3点であるとしている(Nord 2001, p.59)。以下では実際の翻訳プロセスを合わせて、上記の3点の翻訳教

育への応用について述べる。

4.3.1 翻訳ブリーフの重要性

「翻訳ブリーフ (brief)」は、「委託 (commission)」「割当て (assignment)」「指示 (instruction)」などとともに、ドイツ語の Übersetzungsauftrag から翻訳され、翻訳の依頼者の翻訳に対する要求を指し、非常に重要な概念である。翻訳教育において、まずは学生に実際の翻訳作業は依頼を受けて行うものであり、翻訳とは何よりもまず依頼者がある異文化間行為をさせるためのものであることを理解させるために、翻訳に対する職業意識を持たせることが必要である。したがって、翻訳者は依頼者の翻訳に対する要求と目的を理解しなければならず、依頼者の要求を満たすことが翻訳行為の成功にかかわっている。そこで重要な役割を果たすのが、翻訳ブリーフである。Nord (2001) は、「理想的な翻訳ブリーフは翻訳の予期機能、読者、マスメディア、出版の時期と場所、場合によっては訳文の目的または出版の動機などの情報を明示的または暗示的に提供すべきである」としている (Nord 2001, p.60)。教育の過程で、教師は学生に明確な翻訳ブリーフを提供し、翻訳の動機と訳文の機能を理解させる。これにより、学生は最初から翻訳行為の目的志向を認識し、「訳文は翻訳の目的によって決定する」という機能主義的翻訳理論の核を把握することができるようになる。

4.3.2 原文テキスト分析の意義

Nord (2001) は、「翻訳の意図を優先するということは、原文を全く考慮しないということではない」としている (Nord 2001, p.80)。情報源としての原文テキストが、訳文テキストで伝えるべきメッセージの出発点である。翻訳ブリーフの分析の後には、原文テキストに対する分析を行う。Nord は、テキストのコミュニケーション機能は翻訳プロセス全体を貫くと強調し、テキスト分析はテキストそのものの分析だけでなく、社会的行為としての翻訳に対する社会的制約などの要因も分析することが重要であると主張している。Nord (2001) は、原文テ

クストには外的要素と内的要素が含まれると考えている。テキストの外的要因は、情報の送信者とその目的、受信者、メディア、コミュニケーションの場所・時間・動機、テキストの機能などをカバーし、内的要因は、単語、文、文章からコンテンツのテーマが含まれている。テキスト分析の過程では、内的要因と外的要因が互いに影響し合い、制約し合っている。翻訳のコミュニケーション的な本質は、外的要因の重要性を一層強化する。原文テキストの機能・テキストタイプと、訳文の達成したい機能・テキストタイプを比較・分析することで、訳文を調整するかどうかを判断し、Reiss のテキストタイプ理論に従って適切な文体スタイル・言語スタイルを選択する。ドイツの翻訳教育の専門家である Wilss (1996) によると、パラレルテキストを参照することは有効な翻訳教育方法である (Wilss 1996, p.160)。パラレルテキストとは、原文と同じテキストタイプの目標言語で書かれたテキストである。パラレルテキストは、学生が目標文化における対応するジャンルの基本的な規範を理解するのに役立ち、翻訳プロセスにおいて、訳文読者の期待に応えるために訳文のスタイル、用語、言語スタイルなどを調整するための参考として利用することができるのである。文体スタイルと言語スタイルの模倣は、非文学テキストの翻訳作業ではより効果的であると考えられる。以上から、テキスト分析は、学生が翻訳作業をマクロ的かつ全体的に把握するのに役立つ。テキストを分析することは、文化的背景や専門知識の調査、パラレルテキストや資料の検索などの翻訳する前の準備作業を行うよう学生を導き、訳文テキストの機能やテキストタイプに合った翻訳ストラテジーを立てることにつながる。

4.3.3 翻訳問題への機能的階層化の応用

Nord (2001) は、機能主義的翻訳において、翻訳問題は語用—文化—言語—テキストの順に沿って、「トップダウン」アプローチで扱うべきであるとしている (Nord 2001, p.59)。翻訳初心者の最大の問題は、文字通りの意味にこだわって原文の構文構造を変える勇気がないた

め、訳文に「翻訳口調」が出てしまうことにある。これは従来の「ボトムアップ」型の翻訳方法に起因するものである。Nord (2001) は、『ボトムアップ』とは、原文の要素から始め、一語一語変換してから、納得のいく文章になるまで文体を変えていく手法のことである。このような訳し方では、翻訳を語彙と構文の等価を求めるコードスイッチングとして扱う」(Nord 2001, p.87) とし、そのため、どうしても翻訳者は原文にできるだけ忠実に訳そうとし、非常に不自然な言語表現になってしまうとする。一方、「トップダウン」アプローチは、翻訳者が翻訳作業を全体的に捉えることに導くため、この問題を避けることができる。具体的には、まず、翻訳者は語用的レベルで翻訳の目的・機能を明確にし、原文の保留・再現すべきものと情報の受信者の背景知識、心理的期待、コミュニケーション上のニーズ、メディアの条件、および指導上のニーズに応じて調整すべきものを区別する。次に、目標文化の規範に沿った目標言語と翻訳戦略を選択しなければならない。翻訳者は、目標言語が目標環境のテキスト・言語に十分に近いかどうか、特定の文化的知識が正確かどうかを十分に考慮して翻訳を行う必要がある。その上で、翻訳者は言語レベル、テキストレベルでテキスト内一貫性とテキスト間一貫性を検討し、逐語訳に陥ることを避けることができる。

また、「翻訳問題の機能的階層化」は教師が訳文を評価すること、学生の自己評価を指導することにも役立つ。Nord (2001) は、翻訳エラーには、「トップダウン」の順に、語用的翻訳エラー、文化的翻訳エラー、言語的翻訳エラー、テキスト固有の翻訳エラーがあるとしている。したがって、教師は学生の訳文を評価する際、他の問題を無視して文法的な誤りだけ重視するのではなく、訳文全体が翻訳ブリーフで求められている目的・機能を果たしているか、翻訳の機能を果たすために「適当」であるかを重視すべきである。ケースによって評価の重点も違っており、文化的翻訳エラーとテキスト的翻訳エラーの判定は、訳文の機能にどの程度影響を与えるかによって判断される。Nord (2001)

は、「翻訳の目的が特定の機能を読者に伝えることであるならば、その目的の達成を妨げるものはすべて翻訳エラーとなる」(Nord 2001, p.74)、また、「語彙や文法の誤りは、理解を著しく妨げない限り、ある程度は許容される」とし、訳文を評価する基準は、その翻訳戦略が明示された翻訳目的を達成しているかどうかであるとする (Nord 2005, p.16)。

以上から、「翻訳問題の機能的階層化」の「トップダウン」のアプローチは、翻訳中も翻訳後も、翻訳教育に応用できることがわかる。具体的な翻訳プロセスでは、「翻訳問題の機能的階層化」は翻訳の重点を把握するのに役立つ。翻訳後の評価においては、より理論的に包括的であり、操作性が高い評価指標となり得ると言える。「トップダウン」のアプローチは、言語間の等価を見出すという従来の限界を超え、学生の訳文の質の向上に有効であると考えられる。

5. おわりに

本研究は、中国の大学における日本語専攻の翻訳教育の問題として、翻訳教育を「教育翻訳」として位置づけており、専門核心課程にもかかわらず、『国標』と『ガイドライン』が示す学生の諸能力育成を満たしておらず、発展が著しい翻訳業界の現実的なニーズも考慮されていないことを指摘した。これに対し、本稿では、大学における日本語翻訳教育は「翻訳教育」であり、翻訳理論を翻訳教育の基盤に置くべきであることを主張した。そこで、中国における翻訳理論の変遷を概観し、諸理論と翻訳教育との関連を検討した。その結果、中国の大学日本語専攻における日本語翻訳教育に最も適した翻訳理論として機能主義的翻訳理論に注目した。機能主義的翻訳理論は目的志向の理論であり、翻訳教育に対しても明確な方向性を提示することができ、高い操作性を有する。したがって、学生の実践能力の育成に有利であり、翻訳市場とのより良い接続、学生からプロの翻訳者への円滑な移行を達成するのに貢献する。

「翻訳教育」という言葉は、中国語では「翻

訳教学」と訳される。「教学」という言葉は「教える」と「学ぶ」の両方を含み、まさに教育のプロセスを要約したものである。本研究は「どのように教えるか」を基に展開してきたが、学習の主体は「学ぶ」学生である。日本語翻訳教育は、中国の大学における日本語専攻教育の一般的な枠組みの中に位置づけられるため、『国標』と『ガイドライン』が求める学生の日本語応用力、批判的思考力、異文化コミュニケーション能力の育成も考慮し、翻訳教育に反映

させる必要がある。しかし、翻訳能力のみならず、これらの他の能力は「教える」だけでは身につかない。「教えること」と「学ぶこと」の組み合わせ、教師と学生の相互作用を通じて、翻訳教育のポジティブな環境を構築することが必要なのではないだろうか。そのためにも本研究で論じてきた翻訳教育理論は、学習理論など他の領域からの考えを取り入れ、理論的に拡張していく必要があると考える。

〔注〕

- (1) 中国専攻日本語教育は、大学の日本語学科の学生のために行う日本語教育のことである。日本語学科以外の学部生のために設けられる日本語コースとは区別される。
- (2) 中国の「教育部」は、日本の文部科学省にほぼ該当する。
- (3) 外国言語文学教育運営委員会は、教育部高等教育司傘下の上級専門家諮問機関である。
- (4) 本稿での日本語以外の引用、記述などは、特に出所を明記されていない場合はすべて筆者の訳による。
- (5) 専門核心課程は日本語専攻の基本科目である。専門方向性課程と対照的に、中国国内の大学に統一基準が要求される。日本語能力と研究の基本能力を高めることを目的とする。
- (6) 国家レベルの一流専門学科建設大学は、国家レベルの一流学科を持つ大学のことを指す。国家レベルの一流学科構築は、高等教育強国を築き上げることを目標とする中国の高等教育政策であり、選定された学科の教育レベルが中国でトップクラスであり、国家による政策支援や設立支援があることを示す。
- (7) 漢訳の際に原本の形を失しても可とする5項目と、原本の義を決して改変してはならない3項目をいうものである。
- (8) 唐の玄奘三蔵が、サンスクリット語の仏教経典を漢訳する際に、翻訳不能のサンスク

- リット語を5種あげたもの。①陀羅尼のような秘密の語。②薄伽梵のように、多義を含む語。③閻浮樹のように中国にない語。④阿耨多羅三藐三菩提のように先例のある語。⑤般若のように、智慧と訳すと深みが表現できない語。
- (9) 翻訳ストラテジーとは、翻訳者が翻訳する際に、直面する問題を解決するための適切な方法、手段の選択である。

参考文献

- Bassnett, S. & A. Lefevere (1990), *Translation, History and Culture*, London and New York: Pinter Publishers
- Bassnett, S. & A. Lefevere (1992), *Translation, Rewriting and the Manipulation of Literary Fame*, London: Routledge
- Catford, J. C. (1965), *A Linguistic Theory of Translation*, Oxford: Oxford University Press
- 柴明颀 (2010) 「对专业翻译教学建构的思考——现状, 问题和对策」『中国翻译』31 (1): 54-56
- Cronin (2005), *Deschooling translation: Beginning of century reflections on teaching translation and interpreting*, In Martha Tennent (ed.)

- 顿官刚 (2018) 「奈达对泰特勒翻译思想的继承和发展」『湖南科技大学学报』3 (21) :155-161
- Gentzler (1993), *Contemporary Translation Theories*, 上海外语教育出版社
- Halliday, M. A. K (1992), *Language theory and translation practice*, *Rivista Internazionale di Tecnica della Traduzione*, (0) :15-25
- 贺莺 (2015) 『高阶思维取向型翻译教学模式研究』陕西师范大学博士学位论文
- 平塚ゆかり (2010) 「現代日中通訳者の「信達雅」—インタビュー分析を通して—」『異文化コミュニケーション論集』8 (2) :46
- Holmes (1978), *Literature and Translation: New Perspectives in Literary Studies*, Leuven, Belgium: Acco
- Holz-Mänttari (1984), *Translatorisches Handeln: Theorie und Methode*, Helsinki: Suomalainen Tiedekatemia
- House, J. (1997), *A Model for Translation Quality Assessment*, Tübingen: Gunter Narr
- 胡作友 (2008) 「德国功能派翻译理论述评」『学术界』23 (6) :252
- 黄忠廉 (2000) 『翻译本质论』华中师范大学出版社
- 黄忠廉 (2010) 「翻译思想≠翻译理论——以傅雷, 严复为例」『解放军外国语学院学报』33 (5) :77-81
- Jakobson (1959), *On Linguistic Aspects of Translation*, In R. A. Brower (ed.). *On Translation*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 232-239.
- 姜秋霞・杨平 (2004) 「翻译研究理论方法的哲学范式——翻译学方法论之一」『中国翻译』26 (6) :40-44
- 教育部高等学校教学指导委员会 (2018) 『普通高等学校本科专业类教学质量国家标准』高等教育出版社
- 教育部高等学校外国语言文学类专业教学指导委员会 (2020) 『普通高等学校本科外国语言文学类专业教学指南』外语教学与研究出版社
- 影浦峡 (2015) 「職業翻訳教育と日本の大学 (と少し日本語)」『情報学研究: 学環: 東京大学大学院情報学環紀要 = Journal of information studies』88 (1) :1-4
- Kiraly, D. (2000), *A Social Constructivist Approach to Translator Education*, Manchester St Jerome
- 古野ゆり (2002) 「日本の翻訳: 変化の表れた1970年代」『通訳研究』2 (2) :114-122
- Lefevere, A. (1992), *Translating Literature: Practice and Theory in a Comparative Literature Context*. New York: Modern Language Association of America
- 廖七一 (2011) 「MTI 中的翻译理论教学」『中国翻译』32 (3) :25-28
- 刘超先 (1994) 「中国翻译理论的发展线索研究」『中国翻译』16 (4) :3
- 刘军平 (2009) 『西方翻译理论通史』武汉大学出版社
- 刘敬国・陶友兰 (2011) 「突破传统, 自主学习——建立以学习者为中心的MTI 笔译能力培养模式」『东方翻译』3 (5) :19
- 刘和平 (2013) 「翻译教学模式: 理论与应用」『中国翻译』34 (2) :51-52
- 罗新璋 (1984) 『《翻译论集》序』商务印书馆:19-20
- 马玉军 (2016) 「功能翻译理论视野下英语专业学生翻译能力的培养」『语文学刊』36 (7) :80-83
- Mary Snell-Hornby (2001), *Translation Studies: An integrated approach*, Shanghai Foreign Language Education Press
- 穆雷 (2004) 「翻译理论在翻译教学中的作用」『外语与外语教学』26 (3) :43-46
- 穆雷・邹兵 (2015) 「翻译的定义及理论研究: 现状, 问题与思考」『东方翻译』7 (3) :18
- Munday, J. (2007), *Introducing Translation Studies*, London and New York and Canada: Routledge

- 永田小絵・平塚ゆかり (2009) 「翻訳者の内的世界における再構築としての翻訳—村上春樹『海辺のカフカ』の翻訳を例に一」『通訳翻訳研究』9 (0) : 213
- Neubert, Albrecht & Gregory M. Shreve (1992), *Translation as Text*. Kent, Ohio: Kent State University Press
- Newmark, P. (1982), *Approaches to Translation*. Oxford: Pergamon
- Newmark, P. (1988), *A Textbook of Translation*, Hertfordshire: Prentice-Hall
- Nida, Eugene A. (1964), *Toward A Science of Translating: With Special Reference to Principles and Procedures Involved in Bible Translation*, Leiden: E. J. Brill
- Nida, Eugene A. & Charles R. Taber (1969), *The Theory and Practice of Translation*, Leiden: E. J. Brill
- Nord, C. (2001), *Translating as a Purposeful Activity: Functionalist Approaches Explained*, Manchester: St. Jerome
- Nord, C. (2005), *Text Analysis in Translation: Theory, methodology, and didactic application of a model for translation-oriented text analysis*, Amsterdam-Atlanta: Rodopi
- Reiss, K. (1989), *Test types, translation types and translation assessment*. translated by A. Chesterman, in A. Chesterman (ed.) : 105-115
- Reiss, K. & Vermeer, H. J. (1984), *Groundwork for a General Theory of Translation*, Tubingen: Niemeyer
- Sager, J. C. (1983), *Quality and Standard—The Evaluation of Translation: The Translator's Handbook*, London: Aslib
- 瀬上和典 (2018) 「機械翻訳の限界と人間による翻訳の可能性」『AGLOS: Journal of Area-Based Global Studies』1-23
- 杉杉 (1985) 「此“本”不“失”，便不成翻译」『中国翻译』7 (10) : 3-5
- 谭载喜 (1995) 「中西现代翻译学概评」『外国语』18 (3) : 15
- 谭载喜 (2004) 『西方翻译简史』
- Toury, G. (1995), *Descriptive Translation Studies and Beyond*, Amsterdam: John Benjamins
- 鳥飼玖美子 (2013) 『よくわかる翻訳通訳学』ミネルヴァ書房
- Tymoczko & Gentzler (2002), *Translation and Power*, University of Massachusetts Press
- Venuti, L. (1998), 『翻译之耻：走向差异伦理』商务印书馆
- Venuti, L. (ed.) (2000), *The Translation Studies Reader*, London and New York: Routledge
- Venuti, L. (2008), *The Translator's Invisibility* (2nd edn.), London and New York: Routledge
- Vermeer, H. J. (1987), *What Does It mean to Translate?* *Indian Journal of Applied Linguistics*, 13 (2) : 25-33
- Wilss (1996), *Knowledge and skills in translator behavior*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company
- Wilss (1982), *The Science of Translation: Problems and Methods*, Tubingen: Gunter Narr Verlag
- 王克非 (1997) 「关于翻译本质的认识」『外语与外语教学』19 (4) : 47-50
- 王克非 (2021) 「关于翻译理论及其发展史研究」『上海翻译』36 (6) : 14-16
- 修刚 (2018) 「新时代中国专业日语教育的转型与发展」『日语学习与研究』40 (1) : 75
- 谢天振 (2014) 「论翻译的职业化时代」『东方翻译』6 (2) : 4-9
- 谢天振 (2015) 「现行翻译定义已落后于时代的发展——对重新定位和定义翻译的几点反思」『中国翻译』36 (3) : 4-8
- 谢天振 (2018) 『当代国外翻译理论导读』南开大学出版社
- 山田優 (2007) 「ローカリゼーションにおける翻訳と翻訳理論研究」『翻訳研究への招待』

1 (1) : 57-68

叶水夫・卞之琳 (1959) 「十年来的外国文学翻译和研究工作」『文学评论』

张翠玲・焦妹・厉平 (2021) 「新时代语境下 MTI 翻译理论课教学模式探究」『外语电化教学』43 (1) : 52

赵冬茜 (2021) 「《普通高等学校本科外国语言文学类专业教学指南》视域下日语专业核心课程设置研究」『外语研究』38 (6) : 53-59

Translation Theory and Translation Teaching in China

— Functionalist Translation Theory in Japanese Translation Teaching in Chinese Universities —

FU Xiaoxu

Graduate School of Integrated Science and Art, University of East Asia, Yamaguchi, Japan
School of Foreign Language, Yan'an University, Yan'an, China
fty1206@126.com

Summary

Translation is not only a cross-language and cross-cultural social activity, but also a cognitive process in which translators analyze and solve problems under the constraints of various contextual factors. Significant changes have now taken place in the standards of translation, the requirements for translators, the objects of translation, the methods of translation and so on and so forth. Now we have entered the “professionalization era” of translation, in which the translation market has a greater demand and higher requirements for translation talents.

However, there exist low recognition of translation teaching among Japanese majors, and translation work surpasses their skill when they step into the society. College Japanese translation teaching, the main way to train Japanese translation talents, bears a part of the blame for that. The lack of theoretical guidance of “teaching translation” is a key factor leading to the failure of translation teaching.

In order to improve the quality of Japanese translation teaching in Chinese universities and cultivate application-oriented translation talents, this study presents an overview of China’s translation theories in three periods: the “experience period” centered on traditional Chinese translation theories, the “modern translation theory period” dominated by linguistic translation theories, and the “contemporary translation theory period” coexisting with diversified translation theories; analyzes the significance of theories in different periods on translation teaching and the concept of talent cultivation; and draws the conclusion that the functionalist translation theory originated from translator training initiated by translation teachers and practitioners is the most suitable translation teaching theory for Chinese universities as a guiding theory for Japanese translation teaching. The reason for this is that it is most in line with the current national standards and guidelines for translation teaching, and is most closely integrated with the translation market.

Keyword: professionalization, translation theory, functionalist translation theory,
Japanese translation teaching in Chinese universities

